ハクサイべと病情報第１号

平成２１年１１月１３日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除グループ

１　発生状況

11月上旬現在、西三河・東三河地域でハクサイべと病の発生を確認しています。べと病に弱い品種では注意が必要です。降雨が続く等今後の天候によって発生が助長される場合があるので注意しましょう。

２　病徴

葉表から見ると黄緑色の不規則な病斑を生じ、しだいに拡大し葉脈に限られた淡黄色の角斑となる（図１）。葉裏には汚白色のかびを生ずる（図２）。

黄芯系の品種では、葉の中肋に灰色から黒色の病斑を生ずる場合もある（図３、４）。

べと病が疑われるときは、病葉を切り取り、数日以上室温で湿室（高い湿度を保った）状態にしておくと病斑部から汚白色、霜状のかびが生えてくることでべと病と判断できる（図２）。

３　発生生態

第一次伝染源は被害葉などとともに土中で越年した卵胞子と考えられている。

伝染源となる分生胞子は15～19℃前後でよく形成される。20～25℃前後で発芽し、17～27℃前後の温度でよく感染する。

感染には多湿や葉が濡れている状態が必要であり、湿度が低かったり、葉が乾いていると、温度が適していても感染しない。

ハクサイの葉に分生胞子が風雨や水によって飛来すると、気孔や表皮細胞の縫合部から侵入して感染する。

発病すると葉裏の気孔から分生胞子を形成するようになり、これらが飛散して再びハクサイに第二次感染する。

本菌には寄生性の分化があり、ハクサイを侵す菌はコマツナ、カブ、サントウサイ、タイサイなどを侵すが、ダイコンやキャベツは侵さない。

４　防除対策

(1) 急激に発生が広がる場合があるので、発生が心配される場合は表から予防効果のある薬剤を選定し散布しましょう。
(2) 発病が見られた場合は表から治療効果のある薬剤を選定し防除しましょう。
(3) 次作の伝染源になるので、発病した株は抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分しましょう。

表　ハクサイべと病対する主な防除薬剤と使用基準

薬　剤　名	希釈倍数	使用時期	使用回数	主な効果
ヨネポン水和剤	500倍	結球開始まで	４回以内	予防
フェスティバルＣ水和剤	1000倍	収穫14日前まで	３回以内	治療・予防
ホライズンドライフロアブル	2500～5000倍	収穫14日前まで	３回以内	治療・予防
アミスター２０フロアブル	2000倍	収穫７日前まで	４回以内	治療
ランマンフロアブル	2000倍	収穫７日前まで	４回以内	治療
ダコニール１０００	1000倍	収穫７日前まで	２回以内	予防
ストロビーフロアブル	3000倍	収穫３日前まで	３回以内	治療

図１葉表の病斑

図２葉裏の病斑
（霜状のかびが生えている）

図３中肋の病斑

図４　葉と中肋の病斑